令和３年度

大阪大学
文学研究科・文学部　インターンシップ報告書

編集・発行

大阪大学　文学研究科・文学部

教育支援室

560-8532　大阪府豊中市待兼山町 1-5

令和４年８月

目次

はじめに・・・・・・・教育支援室インターンシップ専門委員（文学研究科准教授）　門脇 むつみ　1

演劇関係インターンシップ概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・文学研究科教授　永田 靖　2
兵庫県立尼崎青少年創造劇場インターンシップ報告・・・・・・・・・・・文学部３年　高木 帆乃花　3

音楽関係インターンシップ概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・文学研究科教授　伊東 信宏　4
京都コンサートホール　インターンシップ報告
・・・・・文学研究科博士前期課程１年　朱 蕊艶・漆畑 悠希　5
（令和２年度）京都コンサートホール　インターンシップ報告書
・・・・・文学研究科博士前期課程２年　木村 颯　13

美術史関係インターンシップ概要・・・・・・・・・・・・・・・・ 文学研究科准教授　門脇 むつみ　19
大阪市立東洋陶磁美術館インターンシップ報告書・・・ 文学研究科博士前期課程１年　原田 直輝　20

はじめに

本報告書は、令和 3（2021）年度に大阪大学文学部および大学院文学研究科で行われたインターンシップ、ならびにその準備や事後指導を行っている授業について報告したものである。実習先・人数は以下のとおりである。

○兵庫県立青少年創造劇場〈ピッコロ劇場〉（演劇学）	学部生 5 名
○京都コンサートホール（音楽学）	大学院生 2 名
○国立国際美術館（美術史学）	大学院生 1 名
○大阪市立東洋陶磁美術館（美術史学）	大学院生 2 名

報告書を読むと、インターンシップに参加した学生にとって、実習先での体験がかけがえのないものであったことが読み取れる。学生たちを迎えて指導してくださった受け入れ諸機関の方々に、この場を借りて、心よりお礼を申し上げる。

文学部・文学研究科としての報告書のとりまとめは平成 16 年度から始まるが、関連授業が毎年開講され、現在のような体制となったのは平成 18 年度である。平成 18 年度～令和 3 年度の 16 年間に、音楽・演劇・美術・映画の各方面のインターンシップが行われてきた。ただし映画関係は 26 年度末に担当教員が定年退職したため、現在は開講されていない。

また、令和 2 年度はコロナ感染症拡大によりインターンシップの実施が見合わされる場合があり、本年度についても実施があやぶまれる場合もあったが、複数の機関のご協力を得て、無事に上記の通り、実施することができた。

参考のために、平成 18 年度～令和 3 年度にインターンシップに参加した学生数を掲げておく。

	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	計
音楽	5	3	4	2	4	6	6	3	3	3	3	6	0	6	1	2	57
演劇	4	4	4	3	2	6	2	4	3	0	3	6	0	3	0	5	49
美術	0	0	0	2	2	1	1	1	0	0	0	2	2	1	3	3	18
映画	1	0	1	0	0	0	1	4	0	-	-	-	-	-	-	-	7
小計	10	7	9	7	8	13	10	12	6	3	6	14	2	10	4	10	131

＊単位修得を目的とせずに、インターンシップに参加した学生の数を含む

教育支援室インターンシップ専門委員（文学研究科准教授）門脇 むつみ

演劇関係インターンシップ概要

文学研究科教授　永田 靖

演劇学研究室では、「劇場制作演習」の一環として、兵庫県立尼崎青少年創造劇場の協力のもと、劇場制作についての研修を行っている。2021 年度は、兵庫県立ピッコロ劇団第 71 回公演『いらないものだけ手に入る』（土田英生作・演出）を題材に、10 月 6 日から 10 月 9 日にかけて実施した。以下、まず簡単に概要を記しておく。

まず授業の進め方であるが、年度当初にピッコロ劇場側と研修を実施する公演や日程、おおよその研修内容について相談し、1 学期中には学生に案内する。その上で、受講生に対してオリエンテーションを行う。9 月下旬に実施したオリエンテーションでは、授業担当教員（永田）が受講生に対して、ピッコロ劇場の創設の趣旨、特色、現在の活動状況について簡単に説明した上で、今回の作品と原作者、演出家、劇団の特徴を解説する。同時に今回の研修についての必要な心構えについて述べ、授業の狙いと何を主題として研修を受けるべきかを理解して貰う。授業の狙いは、公立劇場での公演のリハーサル、ゲネプロ、初日を制作として研修することで、演劇上演の現場に触れながら、どのようなプロセスで演劇作品が初日を迎えるか、作品がどのように現実的に解釈され、物理的な諸条件（俳優の個性、劇場の規模、予算規模など）によってどのように細部が決まって行くか、ピッコロ劇場は演劇作品をどのようなものと考え、どのようなものとして観客に提供しようとしているか、そして観客は作品をどのように受け取っていたかなどについて現場の体験を通して学ぶことにある。このことを通して、ピッコロ劇場が地域社会にとってどのような働きをしているかを考察し、同時に広く演劇一般と劇場の持つ今日的な意義と課題について理解とビジョンを持つことが目的である。10 月 5 日の演劇学の授業「観劇実習」において、今回の上演作品である『いらないものだけ手に入る』についての作品分析を行った。ここで研修生以外の学生はこの演習を受けて作品理解を深め、10 月 9 日の上演を観劇する。

研修の受講生は、10 月 6 日から実際にピッコロ劇場において研修を受ける。仕事の内容は、いわゆる「表方」、制作面での仕事である。広報、観客席廻り、ゲネの手伝い、観客受入準備とその対応、上演後の片付けなど様々であるが、併設するピッコロ演劇学校の授業参観やスタッフのレクチャーも受ける。その後、10 月 9 日の上演には場内整理として客入れを担当する。それらを通して演劇公演という「出来事性」についてその一回性、反復性、約束性、社交性について認識を深める。

観劇と研修終了後に、受講生は報告書を提出する。授業担当教員（永田）はそれらによって成績評価を行い、報告書は完成した後に、劇場側に提供し、劇場の活動のために役立ててもらう。

兵庫県立尼崎青少年創造劇場インターンシップ報告

文学部３年　高木帆乃花

■研修先：兵庫県立尼崎青少年創造劇場
■研修期間：令和３年 10 月６日～9 日
■事前研修：令和３年９月下旬、10 月５日

私は、2021 年 10 月６日から９日までの４日間、演劇学の劇場制作研修に参加した。研修を行った兵庫県立青少年創造劇場（通称：ピッコロシアター）は、兵庫県尼崎市にある公立劇場で、ピッコロ劇団とピッコロ演劇学校・舞台技術学校を併設し、「劇場」「劇団」「学校」の三要素を組み合わせた活動を特徴としている。

４日間の研修のうち、前半は講義中心のスケジュールであった。ピッコロシアターの事業について、担当職員の方々がお話をしてくださる形式だ。事業内容は多種多様であるのだが、事業運営についてはどれも、ピッコロシアターの「県立」という性質の影響を受けており、とても興味深かった。税金で運営される公共施設であるから、商業的な利益でなく、あくまでも地域の人々への利益追求が活動の主軸に置かれるのである。一例として、音声ガイド等を準備する「鑑賞サポート」や、ノンバーバル作品を上演する「シアタースタート」が挙げられる。県民の中でも、劇場から足が遠のきがちな障碍者や乳幼児（とその両親）にまで、鑑賞機会を広げようという目的がある。

夜には、ピッコロ舞台技術学校・演劇学校の講義の参観を行った。8 日の舞台技術学校の舞台美術コースの授業は、舞台装置見学とタタキ作業であった。舞台に上がって舞台装置に触れ、実際に木材と工具を使って平台を作る内容は、学生たちが実技経験を増やすもので、やはり、県民の演劇創造の機会を増やそうとする目的意識がみられた。

後半の２日間は、主にピッコロ劇団の公演『いらないものだけ手に入る』の制作業務体験を行った。初日まではフライヤーの挟み込み作業を行い、当日は総合案内としてパンフレット配布やお客様対応を行った。トイレにお客様がいないか確認してきてほしい、という指示には少し面食らってしまったのだが、開演前にスムーズにお客様を座席へ案内し、定刻通りの上演を行うための工夫であるという。さらに、場当たり・ゲネプロ見学と初日ステージの鑑賞も行った。毎回、演出の土田英夫氏からの細かいダメ出しがなされており、短い期間であったが作品へのこだわりを垣間見られたように思う。

これまで、私が鑑賞してきた演劇の多くは、限定的な観客層に向けたいわゆる商業的な存在であった。したがって、ピッコロシアターのような公共の存在としての劇場・劇団については考えたことがなかった。さらに、私のこれまでの演劇経験は「趣味」という特定の一面でしかなかったようにも思う。劇制作に携わったこともあるが、あくまでも、学校やサークルで個人あるいは仲間うちで楽しむ演劇でしかなかった。「仕事」としての職員の方々の演劇経験は、文化発展や政治政策・教育など多様な物事が絡み合い成り立っており、私がこれまで度外視していた、演劇の社会的な位置づけや効能について深く考えるきっかけとなった。それゆえ、私はこの４日間の研修を終えた時、私は演劇を学び考える上での重要な視点を新たに得たように感じたのである。

音楽関係インターンシップ概要

文学研究科教授　伊東信宏

音楽に関係するインターンシップは、例年、いずみホール、ザ・フェニックスホール、京都コンサートホールの３館に受け入れていただいているが、2021 年度に関してはコロナ禍のゆえに各ホールの状況が厳しく、京都コンサートホールのみで実施できた。同ホールについてはこれまで同様２名の大学院生がお世話になった。以下に同ホールでのインターンシップについて、受講生からの報告を掲載する。なお、2020 年度についても京都コンサートホールで１名のみのインターンシップを実施していただいたことは昨年のこの報告書に記したが、当該院生による報告をしてもらう機会がなかったので今回 2021 年度の報告と一緒にまとめてもらった。これについても異例だが本報告書にさせていただく。また、学部生についてはインターンシップが実施できていなかったが、2021 年度末になって箕面市メイプル文化財団（メイプルホール）が受け入れてくださることになった。ただしこのインターンシップについては実施自体は 2022 年度に入ってからとなったので、これについては来年度の報告書に詳細を記したい。

以下、2021 年度のインターンシップ関連の出来事を時系列に即してここにまとめておく。

- ◆ ４月の開講に伴い、インターンシップの受講者を募集。院生２人について派遣先を仮決定。
- ◆ 2021 年 11 月 18 日（木）～20 日（土）の３日間、京都コンサートホールでのインターンシップ実施。
- ◆ 2022 年１月 18 日（火）、上記のインターンシップについて、音楽学研究室の総合演習において、受講者２名が報告。その際、報告が未了だった 2020 年度のインターンシップについても受講生１名に報告してもらった。
- ◆ その後、報告書の内容について受け入れホールと受講生との間で調整した。

困難な状況の中、インターンシップを実施し、受講生を受け入れていただいた京都コンサートホールのスタッフの方々に深くお礼を申し上げます。また、いずみホール、ザ・フェニックスホール、そして箕面市メイプル文化財団の皆さまにも大阪大学のインターンシップについて、ご配慮いただいており、感謝しております。今後も引き続き、よろしくお願いいたします。

京都コンサートホール　インターンシップ報告

文学研究科博士前期課程 1 年　朱蕊艶・漆畑悠希

【研修先】
京都コンサートホール（京都市左京区下鴨半木町　1-26）
【研究期間】
2021 年 11 月 18 日（木）～11 月 20 日（土）
【ホール概要】
　京都市が平安建都 1200 年を記念して 1995 年に開館したクラシック音楽の殿堂「京都コンサートホール」。日本唯一の自治体直営オーケストラである京都市交響楽団の本拠地でもある。建築設計は磯崎新アトリエが、音響設計者は永田音響設計が担当。

大ホール（1833 席）
国内最大級を誇るドイツ・ヨハネスクライス社製パイプオルガンを配し、大編成のオーケストラや合唱団でも演奏可能な、客席とステージが一体化できる華麗な音響空間である
席数：1 階 980 席・車いす用スペース 6、2 階 453 席、3 階 400 席
総：1833 席＋車いす用スペース 6

アンサンブルホールムラタ（小ホール、510 席）
小編成のクラシック音楽の演奏会や、ピアノ発表会などに最適な音響環境を備え、UFO を思わせる舞台照明など独特の雰囲気を醸しだすインテリアに包まれながら、演奏者の息づかいまでが伝わるほどの距離感で身近に音楽と触れ合える。
総席数：510 席＋車いす用スペース 4

【研修内容】
一日目　11 月 18 日（木）9:30～17:15
①アウトリーチ見学
②ホール案内
③自主事業の紹介、企画、広報の話

二日目　11 月 19 日（金）10:00～17:00
①　公演「ショパン！ショパン！！ショパン！！！」のリハーサル見学
②企画の話
③公演ピアノ選定
④翌日公演のチラシ挟み込み

三日目　11 月 20 日（土）9:00～17:00
①公演当日券 SNS 文章書き、写真撮影
②公演「ショパン！ショパン！！ショパン！！！」の準備手伝いと鑑賞

【期間中の公演概要】
公演名：京都コンサートホール×京都市交響楽団 Vol.2「ショパン！ショパン！！ショパン！！！」
場所：大ホール
日時：11 月 20 日（金）14:00 開演
料金（全席指定）　：一般：S 6000 円　A　5000 円　B　4000 円
　　会員：S 5500 円　A　4500 円　B　3500 円
曲目・出演：
＊「アンダンテ・スピアノートと華麗なる大ポロネーズ　作品 22」
　ピアノ独奏　實川　風
＊「ピアノ協奏曲　第 2 番　ヘ短調　作品 21」
　ピアノ独奏　福間　洸太朗
＊「ピアノ協奏曲　第一番　ホ短調　作品 11」
　ピアノ独奏　ニュウニュウ
　指揮　デリック・イノウエ　　管弦楽　京都市交響楽団

主催：京都市/京都コンサートホール（公益財団法人　京都市音楽芸術文化振興財団）
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（劇場・音楽堂等機能強化推進事業）
　　独立行政法人　日本芸術文化振興会
後援：ポーランド広報文化センター

【研修内容報告】
＜一日目＞
＊アウトリーチ見学
　初日はアウトリーチ事業の見学をさせていただくところから始まった。アウトリーチは、手を伸ばして届けるといった意味を持つ言葉で、音楽を通した地域の活性化や、新たな聴衆の獲得、若手音楽家の支援などを目的とした、京都コンサートホールの社会包摂事業の一つである。アーティストが学校や福祉施設など会場へ来られない人やクラシックに触れる機会の少ない人の元へ直接出向き、生演奏を届ける。アーティストは京都ゆかりの新進音楽家が起用されていて、現在の登録アーティストは 4 名(3 組)である。この日は京都女子大学附属小学校でヴァイオリニストの石上真由子さんのコンサートが行われた。演奏された楽曲は以下の通りである。

ファリャ　《スペイン舞曲》
《ハッピーバースデー変奏曲》

クライスラー　《美しきロスマリン》
プロコフィエフ　《無伴奏ヴァイオリンソナタ》第３楽章
ラヴェル　《ツィガーヌ》

曲目はファリャの《スペイン舞曲》から始まり、石上さんと生徒の相互的なコミュニケーションを挟みつつ進行していった。ヴァイオリンがどんな楽器か、どんな奏法があるのか、一緒に考える形での MC の後に奏法を駆使して《ハッピーバースデーのうた》が変奏曲で演奏された。ヴァイオリンを習っている様子の生徒が、食い入るように鑑賞していた姿が印象的だった。

親しみやすい選曲と、絵本の読み聞かせのようにわかりやすい演奏でありつつ、選曲も演奏も子どもに媚を売るようなものでは決してなく、楽器やクラシック音楽に正面から向き合わせ、その楽しさを伝えるコンサートになっていたことに感動した。また、石上さんが自身の経験から、苦手なものとの向き合い方や、夢や自分のやりたいことについての捉え方を熱く生徒たちに語っていた姿が印象的だった。同じ京都を故郷とする石上さんの半生の努力とその前向きな考え方は、医師を志す生徒や音楽家に憧れる生徒はもちろん、その場にいた多くの生徒に響くものがあっただろうと思う。（漆畑）

＊ホールの案内

昼休み後、事業企画課の高野さんにお会いして、簡単に挨拶と自己紹介をさせていただいた。そして、中田さんが京都コンサートホールの施設概要を紹介してくださった。

一階エントランスロビーに配された十二本ある柱は十二支を表しており、それは建築設計担当の磯崎新氏が風水の方面を考えて設計した。エントランスから大小ホールに上昇する螺旋状のアプローチは、会場へ入るまでに、設計者の緻密なロジックと世界観を見たような気がした。シューボックス型の大ホールは全三階、主にオーケストラ演奏を中心としたクラシック音楽を、演奏者と鑑賞者に対して最適な音響条件を提供する。全体がなかなか立派に見える。ドイツ製の日本国内最大級のパイプオルガンを設置していて、内部構造も見せていただいた。ホールでは、西洋楽器だけではなく、日本伝統楽器（例えば尺八）も演奏できる。それについて、私たちは深い興味を感じた。室内楽、リサイタルなどの小編成のクラシック音楽の演奏会や合唱、ピアノ発表会を主な対象とするアンサンブルホールムラタでは、UFO を思わせる舞台照明があり、視聴者に自分がリラックスして、ホールに包まれていると感じさせ、全方位的にコンサートを楽しむことができる。（朱）

＊自主事業の紹介、企画、広報の話

高野さんから自主事業及び企画のお話、中田さんから広報のお話をそれぞれ伺った。

京都の音楽家を支えること、そして京都の音楽家を育てることの２つを使命として、７種類の事業を行っている。高野さんの言葉をそのままお借りすると以下の７種類である。

・「クラシック音楽の殿堂」としての事業
・京都市交響楽団のホームグラウンドとしての事業
・パイプオルガンを活用した事業

・京都コンサートホールならではの独自事業
・人材養成事業
・普及事業
・社会包摂事業

「クラシック音楽の殿堂」としての事業とは、世界中の著名な奏者や楽団を招き、ハイレベルな演奏会を提供する事業である。京都市交響楽団のホームグラウンドとしての事業は、音楽祭の開会記念コンサートや、京都コンサートホール×京都市交響楽団プロジェクトなどがあり、今回のインターンでは、そのうちの「ショパン！ショパン！！ショパン！！！」のリハーサルと当日に同席させていただいた。パイプオルガンを使った事業は、パイプオルガンコンサートシリーズなどで、ホールに設置された国内最大級のオルガンを使ったコンサートを行う。京都コンサートホールならではの独自事業は、今年 10 月から 12 月にかけて行われた「The Power of Music～いまこそ、音楽の力を～」シリーズのように、他のホールでは企画できないような音楽を届ける事業である。人材養成事業は、「若手を育てる」の使命を直に表す事業だが、京都市ジュニアオーケストラや関西の音大フェスなどの事業がある。普及事業は、チケットが安価だったり短時間だったりする気軽な演奏会をすることで、誰でも気軽にホールへ足を運んでもらおうという事業である。ロビーコンサートなどがこれにあたり、19 日には陶器さんより京都北山マチネシリーズについてお話を伺った。社会包摂事業はアウトリーチのように、来てもらうのではなく、出向いて届ける事業がこれに当たる。

これらの企画の仕事は、「どんなホールにしていくかを考える仕事」だと高野さんは仰っていた。「京都の音楽家を支える・育てる」使命感を持って取り組まれている事業は全て、音楽・京都・未来(若者)へのまなざしを感じる切実で愛情深いものばかりであると感じた。

企画立案から準備、当日、終演後に至る諸過程での具体的な仕事内容を講義していただき、作業量はもちろん、考えることの多さに驚いた。特に立案段階でのポイントで、常に客観性が肝要であると強調されていたのが印象的だった。聴衆の審美眼を育てるような内容が求められる一方、チケットが売れないことにはどうしようもないので、集客力があるか、トレンドや話題性はどうかといったところは絶対に無視できず、その上で面白いことをやろうと思ったら、独りよがりな発想ではいけないだろう。

高野さんに講義いただいた後は、中田さんから広報についての講義をいただいた。広報と一口に言っても、その媒体や方法が本当にたくさんあることを、ご紹介いただいて改めて驚くことになった。また広報のスケジュールや戦略の立て方といった舞台裏のお話や、関わる人の多さなどにも驚いた。中田さんも広報の仕事の醍醐味はここにあるとお話しされていた。広報したい内容について、伝え方を考えながら勉強を重ねることで知識が増え、そして広報活動をする中で人との繋がりが増えていくことが、広報の醍醐味であるという。一方で、思うようにいかないところも多くあり、高野さんに「どうすれば大学生にクラシックのコンサートの情報が届くの？何から情報を得ているの？」と聞かれて、大学生であるはずの私もその場で戸惑ってしまったことが、まさに広報の難しさの一部なのだと感じた。（漆畑）

＜二日目＞

＊公演「ショパン！ショパン！！ショパン！！！」のリハーサル見学

場所：京都交響楽団練習場（京都京都市北区出雲路立本町 103）

二日目は京都交響楽団練習場に集合し、まずニュウニュウさんと福間さんのマネジャーさんにお会いして、簡単にご挨拶をさせていただいた。そして私達は翌日公演の「ピアノ協奏曲第 2 番ヘ短調作品 21」（福間）のリハーサルを 1 時間ほど見学させていただいた。リハーサルの間、演奏者と指揮者の間には良好なコミュニケーションが保たれていると感じた。例えば、第二楽章の始まりに指揮者は「ブリーズ」のようなフィリングを入れることを要求することで、聴客に対してより良い聴覚を与える。わずか一時間の見学だったが、指揮者と演奏者の息の合ったやりとり、またその指揮者の曲に対する繊細な理解力を私たちは感じた。（朱）

＊企画の話

和田さんと陶器さんからそれぞれ具体的な企画のお話を伺った。

まず、和田さんからは主催・共催・後援・貸館について教えていただいた。ホールで毎月発行しているコンサートガイドのカレンダーを見ながら、「主催と貸館がちょうど半々くらいで、非常にいいホールだと思います」と誇らしげに話しておられたのが印象的だった。その後「ショパン！ショパン！！ショパン！！！」の企画がどのように進行したのかを詳しく聞かせていただいた。どの企画も日程調整が最初の難関であるそうだが、この演奏会は京都市交響楽団と指揮者、そしてピアニスト 3 名のスケジュールを合わせなければならず、最初から難しい企画であったそうだ。演奏会当日の一年以上前である 2020 年の 8 月には全ての演者が決定し、12 月には前日～当日のスケジュールが決定していたというスケジュール感に驚いた。

陶器さんからは、The Power of Music～いまこそ、音楽の力を～」シリーズの一つであった「兵士の物語」や京都北山マチネシリーズ、そしてアウトリーチ事業についてのお話を伺った。「兵士の物語」は関西の音大・芸大の学生から奏者を起用し、朗読に狂言師を起用した、京都コンサートホールならではの企画である。アーティストが全て異なる大学に在籍する学生のため、それぞれの宣材写真を切り貼りしたポスターでは見栄えがしなかったので、写真撮影から始まったというエピソードが印象的だった。確かに完成したポスターは厳かで雰囲気のあるものに仕上がっている。ケータリングは出演者の意向に則したものを準備するとのことで、本番前はいつもバナナを食べるという奏者のためにバナナを用意したとか、朗読の茂山さんのために学生とは別のお弁当を用意したというお話も印象的だった。京都北山マチネシリーズは、低料金のチケットで、わかりやすく短時間のプログラムということで、初心者でも楽しめる市民に開かれたコンサートシリーズである。若手演奏家の演奏機会を増やし、若手の育成・応援をする意図もある。さらに、午前中で終わるためランチタイムサービスといって、北山のお店と提携したキャンペーンを行うことで、北山全体の活性化も狙った事業である。京都の街と人への愛情あふれる、とても京都コンサートホールらしい事業であると感じた。アウトリーチ事業については先述の通りである。（漆畑）

＊公演ピアノ選定

15:00 あたりに、ニュウニュウさんがホールに到着した。ニュウニュウさんは三人のピアニストの代表として、翌日の公演用のピアノを選定に来られた。今回のピアノの選定はホールの三台のスタンウェイピアノから選んだ。ニュウニュウさんはピアノ一台あたり五分ほど弾き、スタッフに三台のピアノの製作年と最近の使用状況を順次聞いた。ニュウニュウさんはとても明るくて聴衆のアドバイスに耳を傾けるピアニストだと思う。ピアノを選択の時、彼は私たちの思いを聞いて、それから自分の考えに合わせて判断し、最終的に明日のショパンコンサートのテーマに基づいて、音色の比較的柔らかい一台を選んだ。(朱)

＊チラシ挟み込み

ニュウニュウさんを見送った後、ホールの 2 階改札口の場所に戻って翌日の公演のチラシ挟み込み作業をお手伝いした。翌日の公演の入場予定者数は 1200 名程度で、当日券を買って入場するお客さんもいるため、チラシの数が非常に多くて、大変骨の折れる作業だったと思う。しかしホールのスタッフと一緒に作業をしたり、おしゃべりをしたりして、とてもリラックスした雰囲気で、いつの間にか終わっていた。（朱）

＜三日目＞

当日の公演は午後から始まるため、準備はすべて午前中に終わる予定だった。三日目はこの三日間の中で、一番早く始まった。私たちがホールに着いた後、まず高野さんが先に当日の役割分担を説明してくださった。そして楽屋にチラシを置いた。

＊公演当日券 SNS 文章書き、写真撮影

楽屋準備手伝いの後、私達は高野さんに従って事務室に戻って公演当日券 SNS のアップロードを準備した。SNS にアップロードされた内容は、当日のゲネプロ（Generalprobe)の現場に基づいて、写真撮影と原稿が必要である。写真撮影は私が担当し、SNS の原稿は漆畑さんが担当した。写真撮影はできるだけ自然な角度で、ピアニストと楽団が演奏に専念する様子を撮影する必要がある。原稿は、基本的に従来のアップロードされたフォーマットに従って書く必要がある。SNS のアップロードが、公演当日の宣伝や当日券の販売に役立つ。(朱)

＊公演「ショパン！ショパン！！ショパン！！！」の準備手伝いと鑑賞

昼休みが終わったら、私たちはそれぞれ自分の役割をして行った。新型コロナウイルスのため、安全対策が必要で、漆畑さんは入場者の体温を検査して、私は、事業管理の川本部長と一緒に列整備の作業をしていた。チケットの引換場所も会場前に設置されたため、川本部長と一緒にお客さんを正確な方向に案内することが必要である。当日の入場人数は 1300 名程度で、列整備と体温検査両方ともかなり大変な作業と感じた。開場時間前にはすでに会場前に長蛇の列ができていた。私の観察から、お客さんの年齢層は中学生からご年配の方まで広くカバーされて、それはショパンコンサートの魅力をあらわしているのかもしれない。一方、演奏者は三人のハンサムなピアニストで、ピアニストとしての

腕が日本ひいては世界でも有名で、コンサートのターゲットとなる人々の中で、女性のお客さんがかなりの部分を占めていた。開演前に私たちは大ホール内に入り、一階の四列目の席でコンサートを鑑賞した。コンサートの前半は「アンダンテ・スピアノートと華麗なる大ポロネーズ 作品 22」と「ピアノ協奏曲第 2 番ヘ短調 作品 21」の二曲で、途中で二十分休憩し、後半は「ピアノ協奏曲第一番ホ短調 作品 11」だった。演奏者は演奏水準が高く、お客さんもかなり情熱的で、一曲終わるごとに、拍手が絶えなかった。二十分休憩中にスタッフも迅速に対応して、お客さんを化粧室や自動販売機の場所に案内して、後半開場前にお客さんをホールに案内した。終演後私たちは片付けを手伝い、事務室に戻って三日間の感想を書いた。（朱）

【三日間全体の感想】

私は中国音大時代に二年間校内のコンサートホールでアルバイトをした経験があり、コンサートホールで手伝うのは初めてではない。しかし、これは私の人生で初インターンシップで、三日間、大学のコンサートよりも本格的なコンサートの準備をしたほか、企画の知識も勉強させていただいた。表面的には、一つのコンサートを企画するのに必要なのは、コンサートのテーマを考え、芸術家に連絡し、準備して、コンサートを完成すればいいのかもしれない。しかし、実際には、コンサートの円満な開催が決して一筋縄ではなく、各セクションの作業はなかなか複雑で何度も何度も検討と相談を繰り返す必要がある。例えば、「どのようにしてコンサートのテーマを決めるのか」や「どんなバージョンの楽譜を使うのか」など、これら全部を企画課が考えなければならない。 また、有名なコンサートホールの企画課としても、現状に甘んじず、SNS などのソーシャルプラットフォームを積極的に使ってホールとコンサートを宣伝する。20 代の私たちに「SNS がオシャレに見えるにはどのようにしたらいいと思いますか」と考えを尋ねることもあった。このような絶えず学び、絶えず進歩し、絶えず新しいことを追求する精神は私を感動させた。

今の速いリズムの時代の下で、音楽はよく人身の外のものと見なされている。しかし音楽がなくて、人の生活は多くの色を失った。京都コンサートホールは京都のような歴史の古城の中にあり、速いリズムの人々の心を静めて黙々とクラシック音楽を鑑賞させる。京都コンサートホールは年長者のようでまた若者のようで、京都と周辺地区の人に穏やかな上品さと楽しい色をくれたと思っている。（朱）

報告内容の文章にも滲んでしまったが、京都コンサートホールの音楽と京都の街と若手への一貫した使命感にとても心打たれた。私事ではあるが、就職活動を進める中で自らの軸になるのは人や地域といった言葉であると最近気づいた。便利になることや都市化することばかりがいいことなのではなく、地方(都市部も含む各地域コミュニティという意味)がそれぞれの個性を大切に育てて、それがきらっと光って、さらには外へ影響していくようになれば素敵だと考えるからである。京都コンサートホールは、私が夢見るそんな景色を堂々と体現している場所に思えた。高いブランド力を保持し、ハイレベルな演奏会を提供する一方で、京都の街に住む人々や、そこで育つ若手へのまなざしを忘れることがない。そして音楽への意志を失うことも絶対にない。音楽が不要不急だと言われようと、海外アーティストのコンサートの公演中止が相次ごうと、音楽をひたすら届け続けている。この難しい時代

にあっても、若手と手を取り、地域に働きかけながら、果敢に音楽で道を切り開こうとする姿勢はとてもかっこいいと思った。

資料としていただいた高野さんのインタビュー記事は、コロナ禍が始まる直前から今に至るまでのことが生々しく記録されていて、読んでいるだけで心潰れそうになる。しかしこの記事は、スペイン風邪が大流行した 1920 年の作品をフィーチャーした演奏会の企画と、「このコンサートを聴いたお客様に『アフターコロナのクラシック音楽業界は、ひょっとすると一段と輝くのかもしれない』と感じていただけるといいな」という前向きな言葉で締め括られている。足踏みはせず、ひたすら前進の意志を感じ、私はインターン後も何度もこの記事を読んでは気を引き締めている。

質の高さやブランド力を支えるものは、このような使命感や音楽への強い気持ちだけではなく、きめ細やかな心配りであることも 3 日間で感じたことである。陶器さんからアーティストに合わせたケータリングを手配するお話も伺ったし、ホール内はどこを見ても塵一つなく清潔で、ホール内を歩いているときに、掃除の方が忘れて行ったと思しき雑巾を高野さんが見つけて対処していた姿もとても印象に残っている。一緒に歩いていたのに、私はその雑巾が視界に入っていなかった。アーティストやお客さんに対してだけでなく、私たちインターン生に対しても丁寧に対応していただいて、日頃からの丁寧さがこのホールの質を支えるものなのだろうと感じた。

これは余談なのだが、実習中の最も大きな公演であった「ショパン！ショパン！！ショパン！！！」では、当日券 SNS の文章を担当させていただき、その文章を休憩中に私の母に送ったところ、母が公演を見に来てくれた。後日感想を聞くと「生のオーケストラなんて久しぶりだったからとっても嬉しかった」と満面の笑みで答えてくれたのが、自分のことのように嬉しかった。音楽で人を笑顔にするという、コンサートホールのお仕事の他にはなかなか得られない貴重な体験であった。

（漆畑）

（令和２年度）京都コンサートホール　インターンシップ報告書

文学研究科博士前期課程２年　木村颯

【研修先】
京都コンサートホール（京都市左京区下鴨半木町１－２６）
【研修期間】
2020 年 11 月 5 日（木）～11 月 7 日（土）
【ホール概要】
京都市の世界文化自由都市宣言の具体化事業及び平安建都 1200 年記念事業として 1995 年に開館。公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団が運営。

大ホール
・オーケストラを中心としたクラシック音楽の鑑賞・演奏に最適化
・座席数：1,833 席（部隊背後に客席あり 174 席）、車椅子 6 席
・シューボックス型
・国内最大級のパイプオルガン（総ストップ数 90、パイプ総数 7155 本）
小ホール（アンサンブルホールムラタ）
・室内楽、リサイタル等の小編成のクラシック音楽の鑑賞・演奏に最適化
・座席数：510 席、車椅子 4 席

【研修内容】
11 月 5 日（木）
・インターンシップ概要説明
・ホール案内
・企画課業務内容の紹介
・広報について
・大ホール見学
・リハーサル見学
・SNS 文章の作成体験
・公演手伝い（チケット窓口）

11 月 6 日（金）
・座学、新型コロナウイルス感染症の影響について
・企画作成とチケット販売について
・企画考案

・フィードバック

11 月 7 日（土）
・公演準備
・SNS 文章作成
・リハーサル見学
・コンサート鑑賞
・後片付け

【研修内容詳細】
〈初日〉
・広報について
主催公演のチラシを中心に広報の戦略について学んだ。「ベートーヴェンの知られざる世界」のチラシには、ベートーヴェンの有名な肖像画が横向きに配置されている。これは普段とは異なる角度からベートーヴェンを探求するという演奏会の趣旨に即したものであり、チラシを見た人に違和感を与え関心を引くものとなっている。光の三原色を基調とした色使い、中途半端な見開き、「まだまだ知らないベートーヴェンがいた」というキャッチコピーなど手に取ったときのインパクトが大きいチラシとなっている。
・SNS 文章の作成体験
19 時から行われる京都しんふぉにえったの演奏会のリハーサルを見学し、Twitter 上に投稿する同演奏会の宣伝文章を作成した。リハーサルで感じた演奏会の楽しげな様子を 140 字という限られた字数の中で表現することに苦労した。インターン生が書いた文章ということもあるが、何度も校正が入り、係長、部長の承認を得てようやく投稿される一連のプロセスから、SNS の投稿が「仕事」であることを強く実感した。
・公演手伝い（チケット窓口）
19 時の開演に先立ち、18 時から螺旋通路の突き当り、小ホール入口前でチケット窓口業務を担当した。私が担当したのは招待分のチケットだったため、それほど仕事量は多くなかったが、取り置き未精算のチケットをさばいていたスタッフの手際の良さは見習うものがあった。その後入り口近くでお客様への挨拶と誘導を行った。京都しんふぉにえったの演奏会は客層が老若男女まんべんなく分布している印象だった。久しぶりの演奏会という方も多かったかと思われるが、京都しんふぉにえったの個性ともあいまって螺旋通路を登ってくるお客様の足取りは軽やかで、演奏を心待ちにしている様子が伝わってきた。

〈二日目〉
・新型コロナウイルス感染症の影響について
コロナ禍一年目の 2020 年、京都コンサートホールも例に漏れず新型コロナウイルス感染症の影響を受けていた。同年 2 月のコンサートまでは影響がなかったものの、2 月 27 日に京都市からイベント中

止要請を受けると一気に状況は悪化した。4 月 10 日から 5 月 19 日にかけて同ホールは臨時休館、チケット業務も停止となった。特に同年はホールの開館 25 周年にあたり、記念事業が多く計画されていたが、そのほとんどが中止または延期を余儀なくされた。5 月には三日間かけて行われるコーラス・フェスティバルが記念事業として企画されていた。このフェスティバルの目玉はイギリスの作曲家ボブ・チルコット氏の委嘱作品を有志の合唱団が歌うというものであった。本来であれば大ホールでチルコット氏の指揮により披露されるはずだった委嘱曲〈主よ、私たちを平和のための手段にしてください〉Make us a channel of your peace は、フェスティバルの中止によってお蔵入りするはずだった。しかし企画課の高野氏の尽力もありリモート合唱という形で演奏が実現。本来演奏されるはずだった 5 月 24 日に YouTube 上に公開された。感染症によって突如音楽を奪われた合唱団、聴衆、そしてコンサートホールであったが、それでもなんとかして「音楽する」場を提供しようとするところに京都コンサートホールの意地と存在意義を感じた。

・チケット販売について

チケット業務についてシステムと仕事内容を学んだ。チケットの内容は公演によって異なり、主催公演か貸館かによってもフローが異なるため、大量の情報を頭に入れておかなければならない難しい業務だということがわかった。私も自身が所属する団体で公演の中止や延期による払い戻し作業の経験があったため、その苦労は分かっているつもりだったが、それとは比べ物にならないくらい多くの公演とチケットの払い戻しを対応された皆さんの苦労は想像を絶するものだと感じた。

・演奏会の企画立案

＊お題

京都コンサートホールで「こども向け」の企画を立ててください。大ホール／アンサンブルホールムラタのどちらを使っても構いません。スケジュールや予算も考慮に入れません。ジャンルはクラシック音楽とします。

＊提案

公演名：みんなで「作る」演奏会

趣旨：E テレで 1990 年から 2013 年にかけて放送されていた工作番組「つくってあそぼ」で工作を指導してたワクワクさん（久保田雅人さん）監修の楽器作り体験。その後アンサンブルホールムラタで京都しんふぉにえったのコンサート鑑賞。しんふぉにえったのメンバーによる先述の手作り楽器演奏。最後は子供達も手作りした楽器を使ってみんなで大合奏。

＊フィードバック

企画課の皆さんはワクワクさんのことにピンときていない様子だったが（おそらくノッポさん世代？）、企画自体は興味を持っていただけた。「つくってあそぼ」の番組自体は 2013 年に終了しているが、ワクワクさんは YouTube チャンネルを開設しており現在でも知名度はある。ワクワクさんを知っている親も多いと思われる。前半で作った楽器を持った子供たちは後半のコンサートを静かに鑑賞できるのかといった意見をいただいた。ワクワクさんと京都しんふぉにえったという予想もしない掛け合わせが面白いと言っていただけた。

〈最終日〉
・SNS 文章作成
　初日に引き続き、公演のリハーサルを見学し SNS での案内文を作成した。今回は文章の作成に加えて SNS 用の写真の撮影も行った。慣れない一眼レフカメラに苦戦しながらも、トリオが最も魅力的に写る構図を探った。
・公演準備、コンサート鑑賞
　公演前にはロビーに消毒用アルコールを設置し、客席に使用不可の貼り紙をするなど感染症対策の仕事を行った。その後、京都コンサートホール開館 25 周年、ベートーヴェン生誕 250 周年記念事業であり、「京都の秋　音楽祭」の一環として行われた『ベートーヴェンの知られざる世界』Vol.2 ピアニスト・ベートーヴェンを鑑賞した。メインはベートーヴェン自身が編曲した「交響曲第二番」のピアノ三重奏版である。録音がまだない時代、手軽に作品を普及させるための媒体として編曲譜の出版が盛んに行われていた。その一環として書かれたこの作品は、そのシンプルな編成のおかげでオーケストラで演奏されるよりも楽曲の構造がわかりやすいと感じた。交響曲をただ単純にトランスクリプトしたものではなく、ピアノ三重奏曲のレパートリーの一つとして鑑賞するに値する作品に仕上がっているところにベートーヴェンの編曲技術の高さを感じた。公演後は座席の貼り紙をはがす等の後片付けを行った。

【京都コンサートホール開館 25 周年記念事業】
・ Sings for Peace～KYOTO 2020 コーラス・フェスティバル～（5 月 22 日～24 日）中止
・ 古典芸能で辿る　義経・弁慶旅の追憶（7 月 5 日）延期
・ ロンドン交響楽団　京都公演（10 月 4 日）中止
・ ベートーヴェンの知られざる世界 Vol.1「楽聖の愛した歌曲・室内楽」（10 月 10 日）
・ ベートーヴェンの知られざる世界 Vol.2「ピアニスト・ベートーヴェン」（11 月 7 日）
・ 京都コンサートホール×京都市交響楽団プロジェクト Vol.1「佐渡裕指揮バーンスタイン《交響曲第 3 番「カディッシュ」》」（11 月 22 日）中止

【インターンシップ期間中の公演概要】
11 月 5 日（木）
公演名：京都しんふぉにえった～笑いあり！涙あり！感動あり！アレンジ de ガラ！～
場所：京都コンサートホール　アンサンブルホールムラタ
日時：2020 年 11 月 5 日（木）19 時開演（ライブ配信あり）
料金：一般 3,000 円、学生 2,000 円

出演者：京都しんふぉにえった
メンバー：(すべて京都市交響楽団団員)
第一ヴァイオリン：中野志麻
第二ヴァイオリン：片山千津子

ヴィオラ・編曲：小田拓也
チェロ：渡邉正和
コントラバス：出原修司
クラリネット：筒井祥夫
ファゴット：中野陽一朗
トランペット：ハラルド・ナエス
パーカッション：中山航介

曲目：
・　ピアソラ：リベルタンゴ
・　ブラームス：《ハンガリー舞曲集》より第 1・6・5 番
・　ベートーヴェン：エリーゼのために
・　モンティー：チャルダッシュ
・　ウィリアムズ：映画『スター・ウォーズ』より「カンティーナ・バンド」
・　ホーナー：映画『タイタニック』より「マイ・ハート・ウィル・ゴー・オン」
・　ロイド・ウェーバー：ミュージカル『オペラ座の怪人』より序曲
・　ルグラン：ミュージカル映画『ロシュフォールの恋人たち』より「キャラバンの到着」
・　ピアソラ：チャウ・パリ
　　ブエノスアイレスの春
　　ミケランジェロ

主催：京都しんふぉにえった
共催：京都市、京都コンサートホール（公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団）
後援：村田機械株式会社、京都市交響楽団響友会

11 月 7 日（土）
公演名：『ベートーヴェンの知られざる世界』Vol.2 ピアニスト・ベートーヴェン
場所：京都コンサートホール　アンサンブルホールムラタ
日時：11 月 7 日（土）14 時開演
料金：一般 5,000 円、U-30 2,500 円／会員 4,500 円

出演者
ピアノ：高木竜馬※
ヴァイオリン：石上真由子
チェロ：上森祥平
※ゲルハルト・オピッツ氏の入国後隔離に伴い出演者変更

曲目
ベートーヴェン
・　ピアノ・ソナタ第 17 番　ニ短調　作品 31 の 2「テンペスト」
・　ピアノ・ソナタ第 23 番　ヘ短調　作品 57「熱情」
・　交響曲第 2 番　ニ長調　作品 36（ベートーヴェン自身によるピアノ三重奏版）

主催：京都市、京都コンサートホール（公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団）
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（劇場・音楽堂等機能強化推進事業）独立行政法人日本芸術文化振興会、一般財団法人地域創造、公益財団法人日本室内楽振興財団
後援：村田機械株式会社、京都府、朝日新聞京都総局、大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事館、京都新聞、ゲーテ・インスティトゥート大阪・京都、産経新聞社京都総局、毎日新聞京都支局、読売新聞京都総局、α-STATION エフエム京都、KBS 京都

美術史関係　インターンシップ概要

人文学研究科准教授　門脇 むつみ

令和３年度の美術史に関するインターンシップとしては、１名の院生が国立国際美術館のインターン公募に応募して採用された。これは、１学期、および２学期開講の「西洋美術史演習」受講生から希望者が応募したものである。また、大阪市立東洋陶磁美術館に２名が採用された。１名は同館館長より院生に声がけ、１名は同館学芸員より指導教員に声がけいただき、いずれも面接等を経て採用となったものである。いずれも所蔵資料の整理や展覧会業務に携わらせていただき、貴重な経験をさせていただいた。

コロナ感染症の拡大に伴うまん延防止等重点措置により、美術館博物館が休館を迫られ、また再開後も入館者数等を制限する対応が求められるなか、また展覧会の開催そのものが手探りである大変厳しい状況のなかで、学生たちを受け入れ、ご指導いただいた各機関には心より御礼申し上げたい。

大阪市立東洋陶磁美術館　インターンシップ報告書

文学研究科博士前期課程 1 年 原田 直輝

■研修先

大阪市立東洋陶磁美術館

■研修期間

令和 3 年 8 月 1 日～令和 4 年 3 月 31 日

■内容

展覧会撤去・搬入見学/補助（「黒田泰蔵」展、「受贈記念　柳原睦夫 花喰ノ器」展、コレクション展）

資料整理（蔵書整理、スキャン作業、データ入力等）

インターンシップとして、基本的に週 1 日の勤務日を設けていただき、報告者は「黒田泰蔵展」展の搬出及び「柳原睦夫」展搬入の時期は展示作業見学及び補助、それ以外の時期については主に資料整理作業を担当した。

展示作業の見学・補助は、短い期間であったものの特に印象的な作業であった。それぞれの特別展、加えてコレクション展はいずれも陶磁器の展示であり、資料の扱い方や展示上の工夫など、作業の中でさまざまなお話を学芸員の方に伺った。作品の設置を実際にさせていただく機会もあり、大変貴重な体験であった。

資料整理では、蔵書整理やスキャン作業などを主に行なった。作業の中で、調査研究に関する膨大な資料を見させていただき、また、それぞれの資料について学芸員の皆様と様々にお話をさせていただくことも多く、作業を通じて得られる経験にとどまらず、多くの知見を得ることができた。

前年度のインターンシップは新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、勤務日が制限されることもあったが、現場実習として作業を通じ様々な経験をさせていただいたことはもちろん、勤務の際に学芸員の皆様に多くのお話を伺うことができ、非常に楽しく刺激的な経験であった。

大阪市立東洋陶磁美術館は 2 月 7 日以降長期休館に入り、インターンシップは前年度で終了という形になった。今回のインターンシップを通じて得られた多くの経験を今後に活かすとともに、リニューアルオープンの際には是非足を運びたいと思う。